

國學院大學學術情報リポジトリ

高校生の「全員」「原因」「店員と定員」の発音と意識：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, マリ子, Kuno, Mariko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000429

高校生の「全員」「原因」 「店員と定員」の発音と意識

久野マリ子

1. はじめに

日本各地で伝統的方言事象は共通語化によって薄まり消えようとしている。

共通語の土台となった東京方言も伝統的東京方言の特徴は薄れ、首都圏一円に共通の特徴を持つ首都圏方言が話しことばとして広がっている。

かつては、共通語は公の場で用いられるよそ行きの話しことば、日常の言語生活では伝統的方言が用いられるとされていた。国語科教育でも日常の言語生活の中では伝統方言が保たれることがアイデンティティの確立に重要であるから、共通語と伝統方言のバイリンガルをめざすことがよいとされてきた。

しかし、現在では全国で若年層・青年層では伝統的方言は受けつがれず、老年層の伝統的方言は聞けば分かるが自分では話せないという状態になっている。共通語は日本中どこでも通用することばとして用いられてきたので公の場での伝達は可能であるが、日常の言語生活全般に用いる全ての場面を表現するには十分ではない。その代わりとして、首都圏方言の話しことばが、日常生活で用いられる丁寧ではない場面の共通語として、全国各地に広まり、使われるようになっていく。

伝統方言の継承が難しい事象の変化が目立つのは、まず最初に語彙や表現が変化し、ついで文法事象、音韻が変化する。言語要素の中でアクセントは比較的变化しにくいといわれていた。この変化の順番は古典語から現代語への変化にみられるものである。例えば、筆者の兵庫県播州方言で机を移動させることを「カク」という動詞は若年層では用いられないし、否定形の「～へん」は「ナイ」に変わり、アスペクト形式の「～ヨー（～ヨル＜動詞連用形+居る＞）～トー（～トル＜動詞連用形音便形+て+居る＞）」の区別は失われて「～テル＜～ている＞」が用いられるようになり、テ形敬語が用いられなくなっていること等があげられる。音声やアクセントの変化は無自覚なことが多く、あまり気づかれないことが多いようである。

今回とりあげた「全員」が「ゼーイン」に発音されるような変化も、現代日本語の中でおそらくさほど気づかれず、気づいたとしても気にされることも少ないと思われる。

テレビのニュースやレポーターのコメント、ナレーションやタレント発言で「全員」をゼーインと発音されることが気になるようになって久しい。このようにアナウンサーがテレビ番組の中で「ゼーイン」という音声がかれるということは、日本全体にその発音が広がっていることが予測される。

これは第2拍が撥音で次が母音という音環境で、撥音が長音に発音されるという変化である。日本語の音韻体系の中で長音と撥音は対立をするが、このような音環境において撥音と長音が中和するという現象は、日本語全体の音韻体系の変化につながる。この事象が首都圏方言で起こっていることは、小田原、千葉の高校生と國學院大学の学生のデータをもとに久野(2012、2013、2016、2018)で指摘した。

本研究は、もともとは首都圏で行われている、日常の言語生活の中のくつろいだ場での表現や正式な場面では使わない文体での首都圏方言が、全国に拡散している状態を明らかにするために出発した。

平成28、29、30年に國學院大學大学院特別研究の援助を得て研究調査を行い、その一環として、さらに拡充してこのような音声現象について調査を実施している。本稿ではその調査結果の一部をもとに実態を述べようとする。

2. 調査の方法について

「全員」を「ゼーイン」という発音が全国的に広がっているかどうかを明らかにするには、全国的に多くの資料を得ることが必要である。従来の方音韻の体系を求めるための音韻調査は対面調査が必須とされてきた。しかし従来からの対面調査では、少人数の調査者が多人数の話者を対象に全国的規模に実施することは困難である。日本全国で多くの話者が全員を「ゼーイン」と発音をしているかどうかを知るためには、多くの資料が必要である。このような音韻の変化を知るために、発話者が自分が発音していると意識している音声をかなで書いてもらう方法を採用した。この方法は、久野眞高知大学名誉教授の考案したアンケート調査の方式である。この方法では、必ずしも話者の具体的な音声を反映しているとはいえないが、話者の音韻意識を反映させ、どのように発音しているかを確認することができるという点で優れている。対象は、大学生、高校生とした。これらの集団は生育地など比較的均質な言語集団であるため、資料を多く集めることができるという利点がある。

今回の資料は、各地の大学・高校の先生方のご協力の賜である。

アンケートの方法は、学生・生徒諸君に、自分の発音した通りにカナで発音を

書いてもらう方法で、調査票には以下のように依頼している。

以下の単語の発音を例を参考に、自分の発音どおりにひらがなで書いてください。

読み仮名ではありません。正解はありません。知らないことばは書かないでください。

例：迷惑（めいわく） 亀井（かめい） 加盟（かめい）

孔子（こうし） 子牛（こうしゅ）

さらに、以下の話者情報も聞いている。

調査年月日 平成 年 月 日

学校名 () 高校・大学 () 科 () 年

生年月 平成 () 年 () 月生まれ (男・女)

出身学校の所在地

小学校 () 県 () 郡・市 () 町・村

中学校 () 県 () 郡・市 () 町・村

その結果、かなりの話者が調査実施地域の言語形成期の話者であることが確認できた。

筆者自身も國學院大學のクラスで同様の調査を行ったが、カナ表記の精度はかなり信憑性が高いという印象を得ている。

また、調査を依頼した、高校・中学へはできるだけ訪問して直接各学校の先生方にお会いして調査の意図を説明するようにした。すべての学校へ行くことはできなかったので、アンケート用紙だけを送付して依頼した学校もある。後日何地点かは、アンケート調査に答えて頂いた高校へ行き、アンケート用紙の回答と生徒本人の発音の確認を行った。

音声変化の見られる調査項目として、次のような項目も聞いている。

体育館、雰囲気、権威、船医、免疫、船員、ご声援、五千円、犬猿の仲、敬遠、天然、定年、会員、満員、会員証、範囲、全域、一般会員、隊員、退院、現役、原液、「すみません」、「すいません」と普段どちらを言うという使用意識。雰囲気が「ふいんき」ではなく「ふんいき」だと気づいたのはいつかという意識。

以下、上記の項目の中から「全員」「原因」「店員と定員」の発音と意識について報告する。

3. 調査の資料について

今回の調査で2170名の回答を得た。この中には小学生3名、社会人の資料も含まれる。小学生は調査会場に父兄についてきたので同じ調査を行った結果、高校

生の調査結果と同じであったので集計に含めた。

前回、すでに報告をした、神奈川県小田原方言、千葉県館山方言は省いてある。協力くださった中学校・高校・大学は、公文国際中学校 (27人)、八雲学園高校 (13人)、豊南高校 (65人)、横浜隼人高校 (28人)、川越高校 (442人)、長野県伊那西高校 (453人)、弘前高校 (188人)、亀山高校 (80人)、尾鷲高校 (189人)、海邦高校 (88人)、那覇国際高校 (234人)、弘前学園大学 (52人) と國學院大學 (311人) である。國學院大學は筆者のクラスの受講生で、専攻は文学部、法学部、経済学部、神道文化学部、人間開発学部の学生である。

調査期間は平成26年～平成30年にわたる。その間に調査項目の変更があったので、本論では平成28、29、30年の資料を中心に行った。

本稿で用いる資料は、大よそ、地域ごとにみると次の通り。

首都圏方言として、東京都…豊南高校、神奈川県…横浜隼人高校、埼玉県…川越高校、

甲信越地方として長野県伊那西高校、

東北地方として青森県弘前高校、

近畿地方として三重県亀山高校と尾鷲高校、

琉球方言として海邦高校と那覇国際高校、

首都圏の大学として國學院大學

の2021人である。

4. 調査結果の集計と分析

4.1 「全員」

かな表記のバリエーションには、仮名遣い通りの撥音を保持する zen- と、長音の発音に近い zei-、zee- と、拍数全体が短くなる zein がある。拍数が短くなる zein は少数であるが、各地点で現れる。この形式が表記の誤りか、全国的に短い音声があるのかは未確認であるが、「全員」のアクセントは、[ゼーイン (HHHH ~ LHHH)] と平板であるが、ゼーイン (HHHL ~ LHHL) のアクセントも聞かれるようになってきている。第2拍目の長音が短くなり、アクセントもゼーイン (LHL) が聞かれるので、さらにこの方向の変化を先取りしているとも考えられ、この表記は新しい変化の現れとも考えられる。

どの表記も発音に近づけようとする話者の努力が窺える。仮名遣いとしては、「ぜいーん」は、ゼー (えい→えー) の音声を反映している。

○ぜいーん、ぜいーん、ぜいーん

○ゼーーん、ゼーーん、ゼーーん

○ぜえーん、ぜえーん、ぜえーん、ぜえーん、ぜえーん

○ぜいん

○ぜんいん、ぜんいーん

全地点で、共通語の「ぜんいん」は劣勢で、「ぜーいん」が優勢である。仮名遣い通りの「ぜんいん」は今回の資料で約19%にすぎない。「ぜいいん・ぜえいん」は「ぜーいん」と同様に長音を表していると解釈されるので第2拍目の撥音が長音にいう発音が全国的にひろまっていることが分かる。拍数が増える「ぜんいーん」は鼻音全体が2拍目の撥音から語末まで全体に被さっている音を書こうとする反映とみられる。

全地点1940例をまとめると次のようになる。主要な表記を示し、1例しかない表記、明らかに誤りと思われる例は省いた。

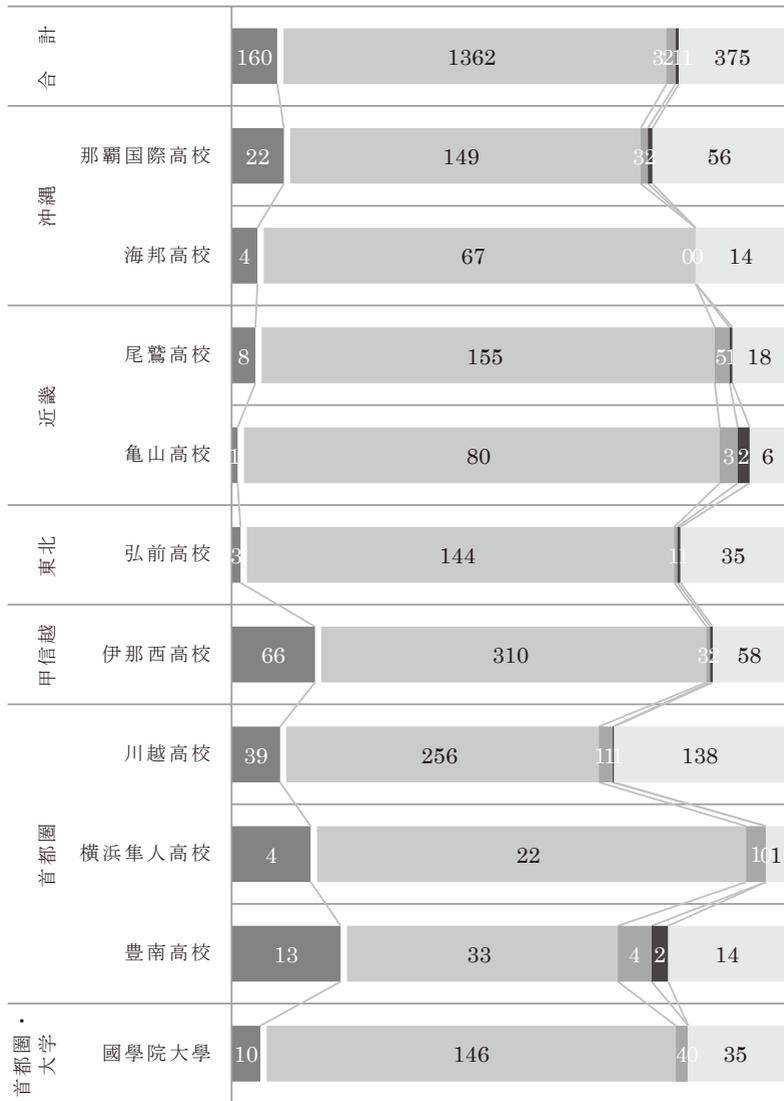
	カナ表記	ぜいいん	ぜーいん	ぜえいん	ぜいん	ぜんいん
首都圏	豊南高校	13	33	4	2	14
	横浜隼人高校	4	22	1	0	1
	川越高校	39	256	11	1	138
甲信越	伊那西高校	66	310	3	2	58
東北	弘前高校	3	144	1	1	35
近畿	亀山高校	1	80	3	2	6
	尾鷲高校	8	155	5	1	18
沖縄	海邦高校	4	67	0	0	14
	那覇国際高校	22	149	3	2	56
首都圏・大学	國學院大學	10	146	4	0	35
合計		160	1362	32	11	375

各地域毎の実態を「ぜんいん」の比率をグラフにしてみると次のようになる。

全地域で「ぜんいん」が劣勢であるが、首都圏の川越高校で31%とやや高い。また、沖縄の那覇国際高校では約24%と「ぜんいん」の表記の比率が高い。國學院大學では18%であった。

「全員」かな表記

■ ぜいいん ■ ぜーいん ■ ぜえいん ■ ぜいん ■ ぜんいん



4.2 「原因」

かな表記のバリエーションには、仮名遣い通りの撥音を保持する gen- と、長音の発音に近い gee- と、gei-、拍数全体が短くなる gein がある。拍数が短くなる gein は少数であるが、「原因」でも各地点で現れる。この形式が表記の誤りか、全国的に短い音声があるのかは「全員」の表記結果のとときと同様未確認である。どの表記も発音に近づけようとする話者の努力が窺える。

「原因」は、「全員」ほどのバリエーションがないのが「全員」との違いである。

- げいいん、げいーん
- げーいん
- げえいん、げえいん
- げいん
- げんいん

全地点でも、「げんいん」は劣勢で、「げーいん」が優勢である。第2拍を撥音が反映された「げんいん」は、約20%である。残りはすべて、第2拍が長音で発音されることを反映した表記である。警察(けいさつ)のように「えい」と表記して、「エー」と長音に発音するため、「原因」も、共通語の仮名遣いとは異なる「げいいん」がある。「げーいん」と長音では書きたくないが撥音ではないことを表すと解釈できる。「げーいん・げえいん・げいいん」の第2拍目を長音にする現象は全国的に勢力があることが分かる。

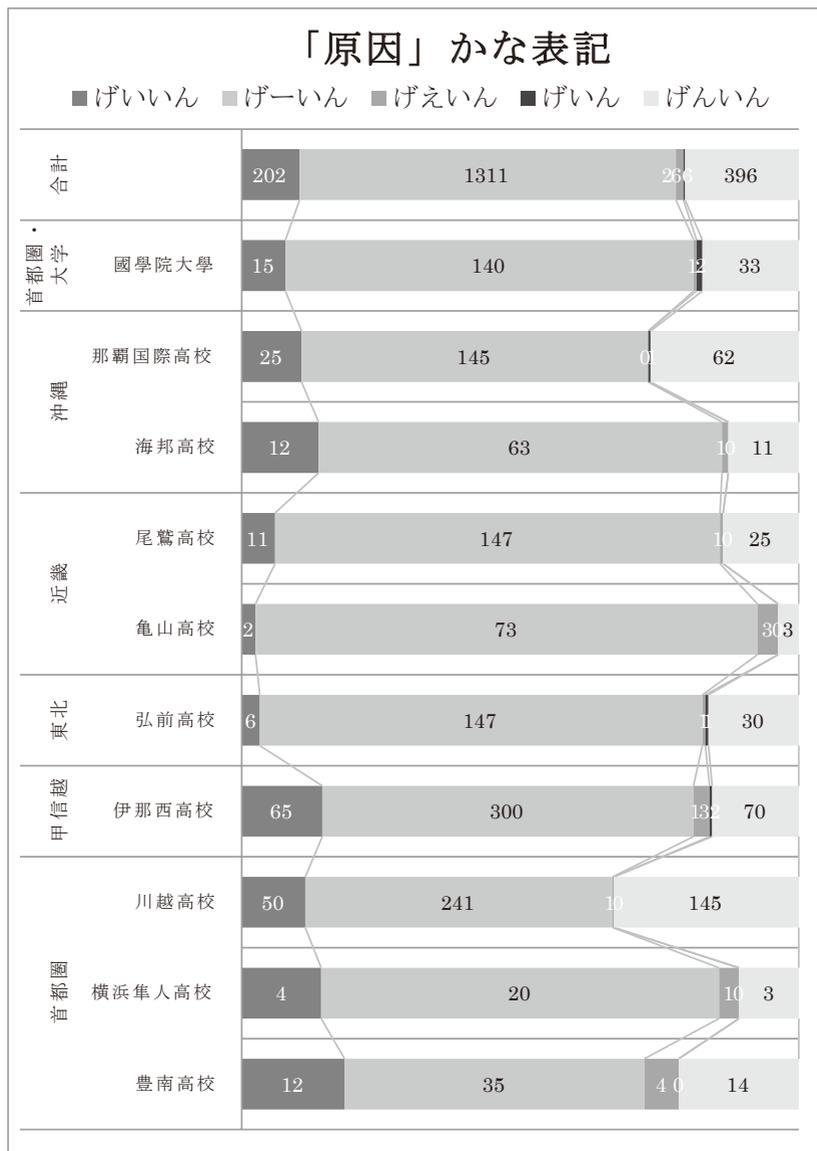
全地点1941例をまとめると次のようになる。主要な表記を示し、全資料で1例しかない表記、明らかに誤りと思われる例は省いた。

	カナ表記	げいいん	げーいん	げえいん	げいん	げんいん
首都圏	豊南高校	2	35	4	0	14
	横浜隼人高校	4	20	1	0	3
	川越高校	50	241	1	0	145
甲信越	伊那西高校	65	300	13	2	70
東北	弘前高校	6	147	1	1	30
	近畿	亀山高校	2	73	3	0
沖縄	尾鷲高校	11	147	1	0	25
	海邦高校	12	63	1	0	11
	那覇国際高校	25	145	0	1	62
首都圏・大学	國學院大學	15	140	1	2	33
合計		202	1311	26	6	396

地域毎の実態を「げんいん」の比率をグラフにしてみると次のようになる。

どの地域でも「げんいん」が劣勢であるが、首都圏の川越高校で約33%と平均

よりも高く、中には1例ずつであるが「げんいー、げいーん」があった。那覇国際高校では約26%とやや高い。海邦高校では約13%、弘前高校では約16%、國學院大學では約17%であった。



4.3 「店員」と「定員」と対立意識

「原因」「全員」と似た音環境の「店員」と、ミニマルペアの「定員」と対立意識についてみていく。

4.3.1 「店員」

かな表記のバリエーションには、仮名遣い通りで撥音を保持する ten- と、長音の発音に近い tee-, tei- と、撥音を保持して拍数全体が短くなる tein がある。

「店員」についての表記には豊富なバリエーションが見られる。この語は調査表の中でもミニマルペアの項目「定員」がすぐ隣に配置されているため、対立を意識して書き分けようとする工夫があったと思われる。

拍数が短くなる tein は少数であるが、やはりこの項目でも各地点で現れる。

どの表記も発音に近づけようとする話者の努力が窺える。

- ていいん
- てえいん、てえいん、てえーいん、てえいん、てえーいん、てえーいん、
- ていん
- てーいん
- てんいん、てんいーん、てんいいん、てーんいん、てんーいん
- てんいい

全体として、「てーいん」がやや優勢である。仮名遣いどおりの「てんいん」は約44%と「全員」「原因」の時の回答よりはやや多く勢力がある。

しかし、「定員」の仮名遣い通りのかな表記である「ていいん」が、2003例の中126例、約6%みられることが注目される。

「店員」についても第2拍目が長音の撥音の「てんいん」の回答が約44%、「てーいん」の発音は約49%である。「ていいん、てえいん、てえいん、てえーいん、てえいん、てえーいん、てえーいん、ていん」の表記は第2拍目の撥音を長音に発音しているという意識の表れであると解釈できる。「店員」についても第2拍目長音の「てーいん」が全国的に勢力があることが分かる。

この項目は、地域によってデータの分布に偏りが見られる。どの地域でも第2拍目長音「てーいん」より第2拍撥音の「てんいん」がやや劣勢であるが、首都圏の川越高校は約62%と「てんいん」のほうが多い。同じく首都圏の國學院大学では49%であった。

一方、近畿の尾鷲高校と亀山高校では「てーいん」が60%、甲信越の伊那西高校で56%、東北の弘前高校では約51%である。沖縄的那覇国際高校で57%、海邦高校が53%となっている。

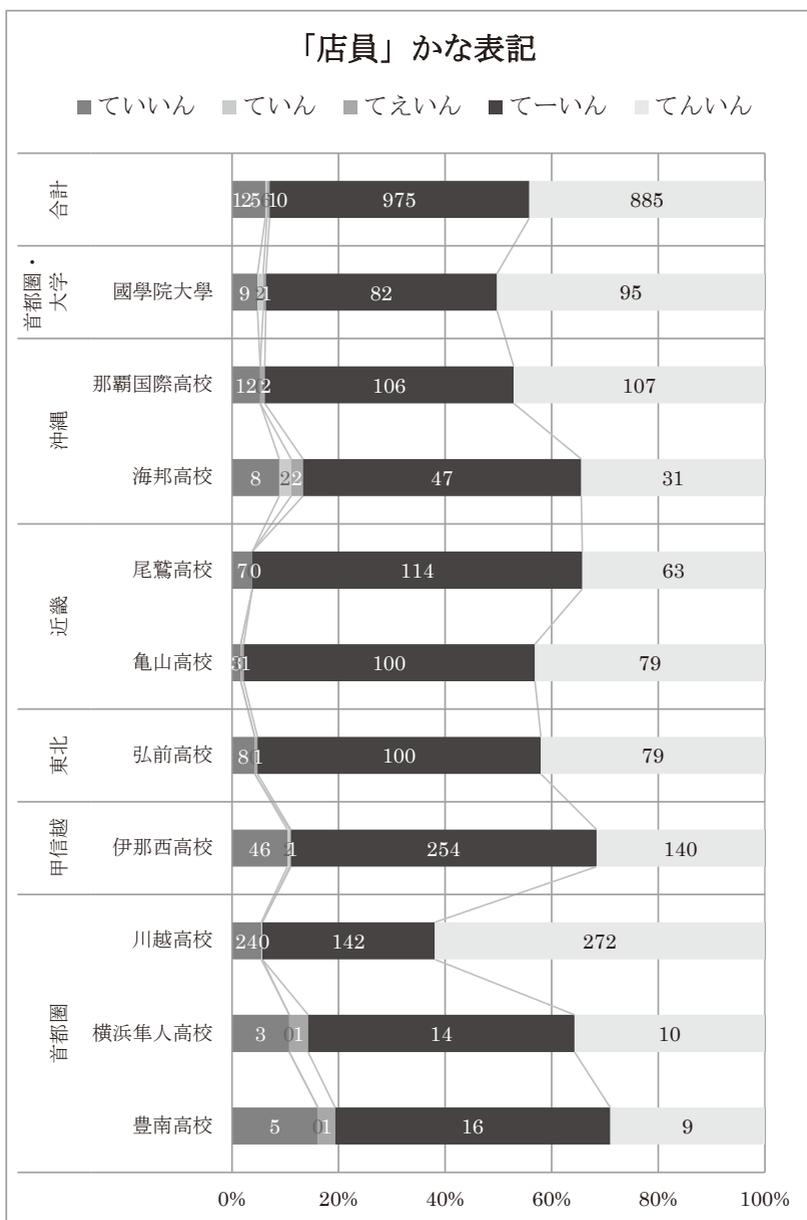
総じて、首都圏では「てんいん」のほうに勢力があるが、東北、甲信越、近畿、沖縄では「てーいん」のほうに勢力がある。しかし、この資料の結果にみられるような地域差が、実態を反映しているかどうかは、この項目だけでは明らかでは

ない。同じような音環境でさらに多くの地点での調査が必要である。

全地点1926例をまとめると次のようになる。主要な表記を示し、他の項目では現れない1例しかない表記や、明らかに誤りと思われる例は省いた。

	カナ表記	ていいん	ていん	てえいん	てーいん	てんいん
首都圏	豊南高校	5	0	5	23	30
	横浜隼人高校	3	0	1	14	10
	川越高校	24	1	0	142	272
甲信越	伊那西高校	46	2	1	254	140
東北	弘前高校	8	0	1	100	79
近畿	亀山高校	3	0	1	48	27
	尾鷲高校	7	0	3	114	62
沖縄	海邦高校	8	2	2	47	31
	那覇国際高校	12	0	2	106	107
首都圏・大学	國學院大學	9	2	1	82	95
合計		125	6	10	930	853

地域毎の仮名表記の比率をグラフにしてみると次のようになる。



4. 3. 2 「定員」

かな表記のバリエーションには、仮名遣い通りの *tei*、長音の発音に近い *tee*、撥音の *ten*-と、撥音にはって拍数全体が短くなる *tein* がある。「店員」については表記に豊富なバリエーションがあったが、「定員」ではもともと第 2 拍目が長音であるが、第 2 拍目が長音に属するバリエーションは豊富である。拍数が短くなる *tein* は少数であるが、この項目でも確認される。どの表記もごく少数ながら発音に近づけようとする話者の努力が窺える。

- ていいん
- てーいん
- てえいん、てえいん、てーいん、てーえん、てえーいん、てえーいん
- ていん
- てんいん、てんいいん、てんいーん

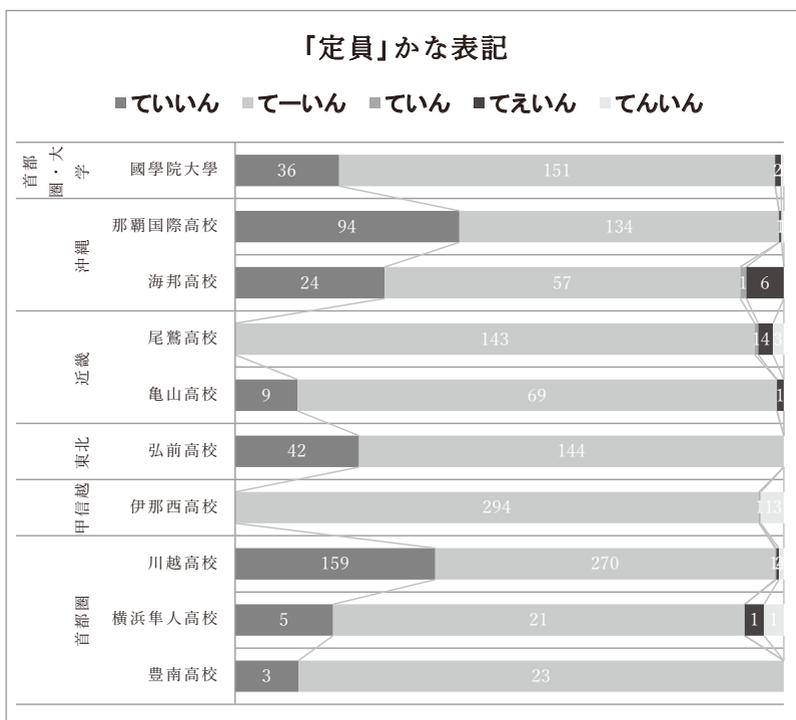
どの地点でも、「てーいん」「ていいん」が優勢である。「ていいん」は仮名遣い通りの表記である。第 2 拍目が長音の「てえいん、てえいん、てーいん、てーえん、てえーいん、てえーいん」は「ていいん」の変種と解釈され、第 2 拍が長音の「定員」は、かな表記としても正答率が高い。

この項目でも「店員」のかな表記である「てんいん」が 1865 人中約 1 % の 24 例確認された。

全地点 1865 例をまとめると次のようになる。主要な表記を示し、他の項目では現れない 1 例しかない表記や、明らかに誤りと思われる例は省いた。

	カナ表記	ていいん	てーいん	ていん	てえいん	てんいん
首都圏	豊南高校	3	23	0	0	0
	横浜隼人高校	5	21	0	1	1
	川越高校	159	270	1	2	4
甲信越	伊那西高校	0	294	1	0	13
東北	弘前高校	42	144	0	0	0
	尾鷲高校	0	143	1	4	3
近畿	亀山高校	9	69	0	1	0
	尾鷲高校	0	143	1	4	3
沖縄	海邦高校	24	57	1	6	0
	那覇国際高校	94	134	0	1	1
首都圏・大学	國學院大學	36	151	0	2	1
合計		442	1383	4	12	24

地域毎の仮名表記の比率をグラフにしてみると次のようになる。



4.3.3 「店員」と「定員」の「対立意識」

ミニマルペアにおける語の対立意識についてみると、1972人の回答のうち、「同じ」と答えたのは642人で32.5%、「違う」と答えたのは787人で39.9%、「どちらとも言えない」というのは122人で6%、「空白」が421人で21%である。

地域毎にみると、首都圏では、「同じ」23%、「違う」が45%、「どちらとも言えない」が3.5%、空欄が28%。甲信越では「同じ」が41.7%、「違う」が31.8%、「どちらとも言えない」が19%。東北では「同じ」が37.5%、「違う」が47%、「どちらとも言えない」が5%、空白が10.5%。近畿では「同じ」が44%、「違う」が27%、「どちらとも言えない」が7%、空白が55%。沖縄では「同じ」が31%、「違う」が38%、「どちらとも言えない」が9%、空白が22%。國學院大學では「同じ」が27.6%、「違う」が51%、「どちらとも言えない」が5.7%、空白が10%である。

甲信越と近畿では「同じ」と意識している回答が「違う」という回答よりも多く、東北では「同じ」という回答は平均より高いが、「違う」と答えた回答が平均よりも高い。沖縄では「同じ」は平均より低い、「違う」が平均よりもやや多

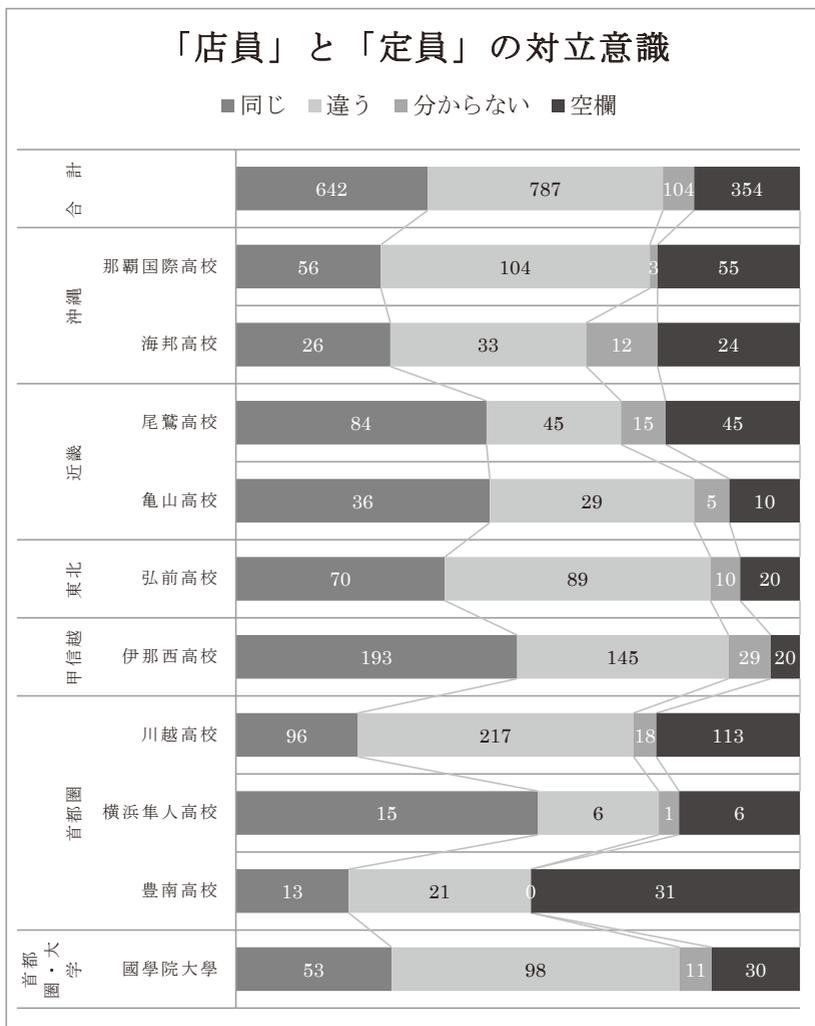
い。國學院大學では「同じ」平均よりもかなり低く、「違う」と意識している値は平均よりもかなり高い。この項目で目立つのは、空欄の回答が多いことである。約18%が空欄になっている。とくにこの項目が違うと意識している首都圏では、空欄の数が多いのが注目される。

全地点1972例をまとめると次のようになる。主要な表記を示し、他の項目では現れない1例しかない表記や、明らかに誤りと思われる例は省いた。

全地点1972例をまとめると次のようになる。主要な表記を示し、他の項目では現れない1例しかない表記や、明らかに誤りと思われる例は省いた。

	対立意識	同じ	違う	分からない	空欄
首都圏	豊南高校	13	21	0	31
	横浜隼人高校	15	6	1	6
	川越高校	96	217	18	113
甲信越	伊那西高校	193	145	30	87
東北	弘前高校	70	89	10	20
近畿	亀山高校	36	29	5	10
	尾鷲高校	84	45	15	45
沖縄	海邦高校	26	33	12	24
	那覇国際高校	56	104	20	55
首都圏・大学	國學院大學	53	98	11	30
合計		637	773	122	421

地域毎の対立意識の比率をグラフにしてみると次のようになる。



「分からない」という選択肢は、調査では「どちらとも言えない」という表現で聞いている。それ故もし、どちらとも決めかねると迷うならこの選択肢を選んでもいいはずであるが、それより空欄の数が多いのはどのような理由によるのであろうか。

例として川越高校の、「店員」「定員」のかな表記と対立意識の回答の5人分の例を示す。

定員	店員	対立意識
ていいん	てんいん	分からない
ていいん	てーいん	分からない
てーいん	てんいん	分からない
てーいん	てーいん	分からない
ていいん	てんいん	分からない

定員	店員	対立意識
てーいん	てーいん	空白
てーいん	てんいん	空白
ていいん	てーいん	空白
てーいん	てんいん	空白
ていいん	てんいん	空白

「分からない」、「空白」の回答には「店員」と「定員」の表記が合っていないと混同がみられる。「店員」「定員」は同じ表記の場合も異なる表記もあるが、これらの語が同じ発音であると解釈することもできる。

次に川越高校の「同じ」、あるいは「違う」と回答した例の5人分を示す。

「同じ」という回答は「店員」「定員」とともに同じに表記しているし、「違う」という回答には異なる表記をしている。表記と対立意識がかなり一致している。

定員	店員	対立意識
てーいん	てーいん	同じ
てーいん	てーいん	同じ
ていいん	ていいん	同じ
てーいん	てーいん	同じ
てーいん	てーいん	同じ

定員	店員	対立意識
てーいん	てんいん	違う
てーいん	てんいん	違う
てーいん	てんいん	違う
ていいん	てんいん	違う
ていいん	てんいん	違う

ミニマルペアにおいては、両者が同じ発音であるという意識はほぼ33%それほど高くないが、表記と意識の上ではさまざまな混同があり、第2拍目の長音と撥音が中和して長音が優勢になる可能性がある。

5. まとめ

各地の表記をもとにかな表記を検討してきた。この資料は話者が自分が発音していると思っている表記であることに注意が必要である。

話者の意識は、規範意識が強く実際の音声と意識の間に乖離があることはよくある。方言調査に行くとどこの地方でも「私は標準語で話している、方言はありません。」という答えが返ってくる。しかし、実際に調査してみるとその土地の方言の特徴が多く現れることが多く、たいていの場合は話者の意識と具体的な方言音声には差がある。この結果も、話者が発音していると意識している表記であるから、例えば「ぜんいん」と表記していても、具体音声では第2拍目を長音で発音しているという可能性は否定できない。かつての高知方言で「四つ仮名」の意識を調査したときにも、中年層以下の話者で「四つ仮名」の区別があると答

えていても、「富士」「藤」のような具体的な音声では対立が確認されなかったり、音韻意識が曖昧な例が観察されたりする例があった。

第2拍目の撥音が長音に発音される現象の要因を考えると、第2拍目が撥音で長音に発音される語には漢語が多い。耳から聞いて覚える理解語彙が使用語彙となったときに対立が曖昧になると考えられる。「雰囲気」をフィンキという音声も増えているが、漢字よりも音声を聞いて耳から覚えた語であることが音の変化の一因であると考えられる。

この長音と撥音の中和は、語例「全員」「原因」がともに2拍目が長音でも撥音でも対立する語があったとしても、若年層においては使用語彙でも理解語彙でもないことが多い。語の馴染み度が関与していると考えられる。例えば、「全員」の対立語「ぜいいん」としては「税印」があるが使用語彙ではない。一太郎ATOKの文字変換候補としては、「ぜいいん」と入力すれば、税印と全員くぜんいんの誤り>という表示が現れる。

「原因」の対立語の「鯨飲」は、高年層では使用語彙であっても、若年層では理解語彙ですらない。また一太郎の変換候補としては「げいいん」と入力すると「原因」が現れる。

それに対して、「定員」と「店員」は第2拍目が長音か撥音で対立をなすミニマルペアで使用語彙である。2011年2月16日TBSのテレビ放送で「定員とだしたテロップは店員の誤りでした」という訂正テロップを見たのがこの現象の早い例である。

一太郎ATOKでは、すでに「ていいん」と入力すると「店員くてんいん」の誤り」という変換候補が現れる。

今回の調査では、音声実態そのものではないが、文字表記の上でもこの対立が中和している現象が指摘できた。「定員」と「店員」のかな表記が交替する例もある他、様々な表記のバリエーションが現れ、なんとか区別をしようとする話者の表記への工夫と努力がうかがえる。「同じ発音か」という質問に、空白の回答が多いのも、あるともないとも言えないがはっきりとは説明ができないという、あたかも「曖昧アクセント」の話者の型意識のように音韻論的に対立が曖昧な状態かあるいは無いということに対する抵抗が現れていると解釈できる。

後ろに i n を伴う第2拍目の長音と発音が中和する現象が、日本語の中ですべての語において起こっているのか、たまたまこの語において語的に起きているのかは他の語例の音環境をそろえた考察が必要である。今回取り上げなかった、「会員」や「満員」「婚姻」と「行員」のような後ろが i n の環境の他、「犬猿」と「敬遠」、「延々」と「永遠」、「ご声援」と「五千円」のような後ろに e n を伴う語においても同様の現象が予測されるので残りの資料の分析を急ぎたい。また、「法名」がホンミョーという発音もテレビで聞く。これは、長音が撥音に交替している例で、長音と撥音の対立が曖昧化している例といえる。「全員」「原因」「店員」は

ど数は多くないがこのような語例で同様の表記が確認されている。語毎の変化のスピードに差があるが、同じ環境で条件が同じであれば音韻変化は一斉に起こるから、このような変化が日本語全体に起こるという予測が立てられる。

一つ懸念があるとすれば、このような第2拍目の長音と撥音の中和は話しことばの上でいつの時代にも起こっていたのであるが、文字の制約によって対立がひき戻されてきたのではないかという解釈ができることである。現在のように音声入力やタイプによる文字入力が普及したことによって、書きことばの仮名遣いの規範が緩くなったことによって顕現化されたにすぎないのではないかということも考えられる。

筆者の内省ではこのような現象はないが、今回のデータのからも明らかなように、このように規範意識の強い話者は必ずいる。語的な音声変化が日本語の音韻変化なのかは、このような規範意識の強い話者が減少し、劣勢となった時に明らかになり、そうなったときにこの変化は完成したといえるであろう。

この変化の要因の一つとして、このような漢語が若年層において使用語彙や理解語彙ではないないことがあげられる。耳から聞いて覚える語は漢字との関連が薄く、正しく漢字を理解することが以前ほどは重視されないという社会的関心の薄さも関係があるだろう。今回の調査でも調査語「定員」を「じょーいん」とするような「正しく」読めない表記も見られた。さらに、ワープロソフトの親切な変換候補も発音の変化の後押しをしているかもしれない。発音通りに入力したら予想外の漢字が現れたという経験があれば、発音と仮名遣いとの差に気づき、仮名遣い規則に合うように文字入力を修正するだろう。予測変換に幅があれば、発音と仮名遣いとの乖離が加速的に進められる可能性がある。

参考文献

- 久野マリ子編著 (2018) 『新東京都言語地図—音韻—』(國學院大學大学院久野研究室)
久野マリ子 (2016) 「首都圏方言について考える」(『国語研究』79 國學院大學国語研究室)
三井はるみ編 (2014) 『首都圏言語研究の視野』「首都圏の言語の実態と同項に関する研究成果報告書」(国立国語研究所共同研究報告13-02)
久野マリ子 (2013) 「新東京都言語地図—音韻・アクセントといくつかの項目の分布から—」(『国語研究』76 國學院大學国語研究室)
久野マリ子 (2012) 「神奈川県小田原方言におけるいくつかの音声現象の動向」(木川行央氏と共著『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』18)

調査にご協力下さった各学校の教員の方々、生徒・学生の皆さんに感謝申し上げます。